

専門医が 診る

県立広島病院呼吸器内科 石川暢久部長



いしかわ・のぶひさ 広島大医学部卒。東京大医学研究所ヘルシンキ大、広島大分子内科学講師を経て、14年から現職。日本呼吸器学会専門医・指導医。

FILE 50

がなくなっていきました。いまは化学療法の進歩で外来でも治療できるようになり、患者さんの人となりも分かるようになってきました。薬で肺がんが治るわけではありませんが、中には3年以上生存した人もいます。やりたいことに充てる時間ができます。さらに、その間に次の薬が開発される可能性はゼロではありません。

「新たに「ニボルマブ」という薬が、肺がんの治療薬として認可されました。

肺がんは、治療することの少ない「難治がん」の一つ。自覚症状が現れたときには手遅れの場合が多く、延命と症状の緩和を目的とする治療が中心となる。ただ、近年は新薬の登場で、従来の抗がん剤治療では平均1年だった生存期間が、2年、3年と延びるケースもみられる。県立広島病院（広島市南区）呼吸器内科の石川暢久部長（47）に新薬の効能を聞いた。

（門脇正樹）

肺がん

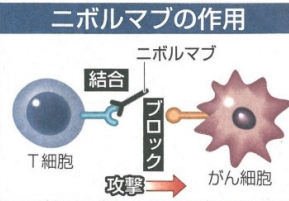
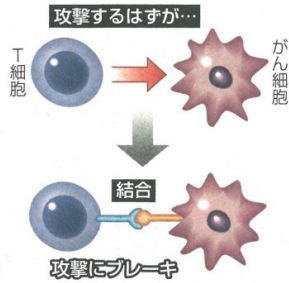
「最近の動向を教えてください。」
がんとは、遺伝子が何らかの異常をきたすことで発症する病気です。これまで症状が進んだ肺がんには一様に、抗がん剤治療が行われてきました。ところが変異した遺伝子の中には、「ドライバー遺伝子変異」という特定の系統があることが判明し、状況が一変しました。それを狙い撃ちする「分子標的治療薬」が開発されたためです。

「ドライバー遺伝子変異は次々に発覚しており、既に少なくとも8種類状態のまま推移する人もいます。薬

類別明しています。そのうち「EGFR」と「ALK」の2種類については治療薬が国に認可されています。他の6種類の薬も開発が進み、いずれは認可されるでしょう。肺がん治療は、個々の患者さんの病態に合わせた「オーダーメイド」の時代になりつつあります。

「ドライバー遺伝子変異を狙い撃ちする薬は、必ず効くのでしょうか。残念ながら個人差があります。症状が劇的に和らぐ人もいれば、同じ状態のまま推移する人もいます。薬

がん細胞に対する通常の免疫反応



新薬で生存期間延長も

は保険が適用されますが、とても高額です。効果が十分ではないケースや乏しくなったケースでは、「いつまで投与するか」といった、見極めが非常に難しい問題も生じます。一方で、原因となるドライバー遺伝子変異の種類が特定できない人もいます。こうした人や分子標的治療薬が効かなくなった人には、従来の抗がん剤治療で対処しています。

「手術で根治することはできないのですか。」
初期の段階で肺がんを見つけたことができれば、手術で完全に切り取ってしまうことも可能です。しかし、肺がんは他のがんと比べても自覚症状が極端に乏しく、せきや血たんなど兆候が表れたときは、他の部位に転移していることが少なくありません。国内で2013年に肺がんで亡くなった人は7万7344人。がんによる死因のトップです。

「私が医師になった21年前は、肺がんイコール死でした。告知の方法も吐き気止めの効果も十分ではなく、診断から半年後には多くの患者さんが死んでいました。」

「予防の手だては、発がんの大きな因子として、喫煙と加齢が挙げられます。統計では、罹患率、死亡率とも40代後半から延びています。たばこを吸っている人は、肺がんが「難治」だということを確認しておくべきです。早期発見の手段としては、定期検診を続ける以外にありません。」

「新薬の相次ぐ開発で、患者の生存期間が延び、大きな希望となっています。とはいえ残念ながら、進行した肺がんは薬で治せるわけではありません。喫煙している人や受動喫煙の機会が多い人には特に、定期的な検診をお勧めします。」

ここがポイント

新薬の相次ぐ開発で、患者の生存期間が延び、大きな希望となっています。とはいえ残念ながら、進行した肺がんは薬で治せるわけではありません。喫煙している人や受動喫煙の機会が多い人には特に、定期的な検診をお勧めします。